

が受けた感じでは、英国における新技術の伝播が他国に比してとりわけ早いとは決して言えない。その意味で、上記の俗説は、少なくとも積極的に否定されたわけではない。例えば、抄紙機付設の特殊プレスの場合などでは、英国には「甘やかされた」中小企業が多く、それが伝播速度を鈍化させたのはどうも確かなようである(p. 312)。

4

この貴重な実証研究によって明らかとなったことは、新技術の伝播は一般に緩慢だということである。つまり、新しい知識が広まるのにはまず時間を要し、それが実験を経て実地に採用されるまでに再び数年が経過する。さらに、特定国内の過半数の企業がこれを使うに至るまでに何年かかかる。これを合算すると、10年以上に達することもあるであろう。(もっとも、技術の改良は絶え間なく行なわれているから、上記のような計算を厳密にやろうとするのは無理である。さらに、その答は、測定方法によって変わってくる。例えば、企業単位で測れば、生産量を単位に測るよりも伝播速度は早くなる。)

さらに、技術の普及のありさまは、あらかじめ予想されたように、Gompertz 型曲線によってよく近似されることが解った。既述のように、普及の速度を上下させる要因にはいろいろあるが、なかでも期待収益率がもっとも大きな役割を果す。

以上の2点に関するかぎり、伝播のパターンは本書を通じてきわめて明確に摘出されたと評しえよう。

この新しいタイプの研究にあえて苦言を呈するとすれば、この書で対象となったのがすべて先進工業諸国であるため、ここで得られた結論が、経済開発過程における技術伝播の理解に資するところはほとんどない。つまり、伝播が進むためには、技術的ならびに経済的前提条件が恐らくいくつかあるはずなのだが、これらの諸国ではそれらの条件が当然のこととしてすべて満たされているため、分析の上でも意識されることが全くない。ところが、低開発国において技術伝播が行なわれるには、まずこれらの必要条件が整備されねばならない、と考えられる。技術伝播の研究の現代的課題は、これらの条件を分析的に明らかにすることにこそあるのではなかろうか。

本書に収められた諸研究は、総じて技術伝播のケース・スタディーという感が強く、その意味で「叙述的」であり、ことさら個性的な分析視角があるというわけでもない。その意味でいささか平板であり、exciting なところは全くない。あるいはこれは共同研究の生んだ弱点なのかもしれない。この地道な好研究をより一層発展

させるためには、これに強烈な問題意識のエンジンを付加することがぜひとも必要であろう。〔尾高煌之助〕

布 目 真 生

『マーチャント・バンキング』

金融財政事情研究会 1976. 4 x+239+xii ページ

(1)

これはマーチャント・バンキングに焦点を合わせて克明に描写された、国際金融の現代史である。

本書はマーチャント・バンクとはなにかという設問から始まる。マーチャント・バンクとは、かつてはシティの奥深くに、大英帝国の経済的覇権の中樞を握るものとして、神秘のベールを通じて窺い知られる存在であったという。しかし、いま、われわれの画くマーチャント・バンクのイメージは慌ただしい国際電語の騒音のうちに数百、数千万ドルの貨幣の取引を、瞬時に、しかも絶対の確実さをもって成立させる、ユーロ・ダラー市場のチャンピオンたちである。

マーチャント・バンクはイギリスの金融機構のなかの1つの機関である。著者は自らの設問に答えるために、綿密に傍証された金融制度史論を展開する。われわれ読者は歴史的な制度としてのマーチャント・バンクの全貌を提供される。マーチャント・バンクとは先づ第1に、国際的なクレジットの、ということはすなわち、国際通貨の、供給者であり、しかも、つねに、なんらかの特質において、その第1人者であり続けてきたということが確認される。

貨幣とは人類が創造してきた歴史的な制度である。それは貨幣が金であろうと紙片であろうと変りはない。貨幣は歴史的な制度としてのみ存在する。著者はわれわれに、歴史的制度としてのマーチャント・バンクを示したが、それは同時に、歴史的制度としての国際通貨の発展のもっとも重要な局面を示したことになる。マーチャント・バンクとはなにかという問に対する答えは、国際通貨とはなにかという問に対する答とかなり重なり合うのである。

実際、著者はマーチャント・バンクを厳密に定義することは困難であるという。それゆえ、これらマーチャント・バンクの行なってきた仕事、つまり、マーチャント・バンキングも1つの機能としてとらえられるものではないとするのである。著者は「マーチャント・バンキ

ングの本質は、その初期の時代から今日まで、イギリスの金融、商業、産業の全過程における高度に適応力ある創造的要素としての存在にある」としている(p.14)。むかしロンドンのシティのマーチャントのあるものたちが創造的活力を発揮して国際貿易のクレジット供給者として大をなしていった。シティを拠点として国際通貨が創造されたのである。シティを拠点とする国際通貨の供給者、この伝統をつぐに足る先見性と技術的能力を保持する機関こそがマーチャント・バンクの名に値するということであろう。

(2)

第1章『マーチャント・バンクの伝統』において、著者はマーチャント・バンクがロンドンのシティから発生した事情を明らかにする。「シティが一方ではイギリス自体の金融市場であると同時に、他方ではそれを通じて世界の大部分をカバーする市場の中心であったことを利用して、マーチャント・バンカーはクレジットの創造者となったのである」(p.14)。それは「ロンドンが全世界の商品を取り扱ったので、世界大の範囲で各種通貨建ての手形を取扱わねばならなかった」(p.14)からである。このロンドンの為替手形すなわち、ロンドン・ビルは多年にわたるシティの創造的活動によって、「あたかも金と同様の価値あるものとみなされるようになっていた」(p.6)。マーチャント・バンク誕生の地はロンドン以外にありえなかったのである。

このマーチャント・バンクの伝統は、第2章『引受商社としてのマーチャント・バンク』の冒頭において、さらに具体的に示される。18世紀から19世紀にわたって、「しばしば特殊の商品の取引に専門化していた商人(マーチャント)」のうち成功したものたちは、「彼らの名前と評判が確立するにつれて、現金よりもむしろ為替手形をもってその業務の一部を行なうにいたった」(p.21)。

「これら商社のサインに伴う異例の高い名声が新しい信用形態、引受信用の拡張をもたらす」(p.27注)ことになる。「すなわち、外国との取引を希望しながらも、資金の乏しい商人はコミッションを払って、これら大商人に自己の手形を引き受けてもらったのである。大商人は、この引受コミッションの収入が本来の商売よりも大きいところから、しだいに本業をやめて引受業務を行なうにいたった」(p.21)。つまり、マーチャントがバンカーになったのである。

貿易商人が自らの信用を貨幣として販売するというこの極めて創造的な行為は、当時のイギリス経済のニーズに適確に応え、大英帝国の発展を先見するものであった

から、やがてマーチャント・バンクという強力な歴史的制度として確立されるのであるが、このマーチャント・バンクの創造した信用貨幣はその成立の経緯からして当然に国際通貨であった。この国際通貨ロンドン・ビルの全盛こそ大英帝国の栄光のそれと期を一にするものであり、同時にマーチャント・バンカーのシティにおけるプレスティジの頂点でもあった。

(3)

ポンド・スターリングをロンドン・ビルに乗せて全世界に飛ばせるというマーチャント・バンキングは第2次大戦をもって完全に過去のものとなる。その要因は2つの世界大戦がもたらした政治、経済的結果である(p.20)。要するにイギリスの政治、経済的覇権が失われたことである。興味深いことは、これと同時に、イギリス内部においても、19世紀を通じて非力であった預金銀行が合併と合理化を経て、クリアリング・バンクとして強大化し、シティに重きをなして、マーチャント・バンクの伝統的業務を脅すに到ったことである。

この歴史的事実の意味するところはかなり深長であるように思われる。すなわち、マーチャント・バンキングとイギリス経済との結び付きは本質的なものではなく、技術的かつ便宜的なものであったということである。

17世紀の半ば、清教徒革命を経て、ますます議会の統制の下に追い込まれてゆく絶対王制に対し、金匠銀行家は公信用を極端に拡張することによって、近代的な金融機構を生成するという極めて創造的な、しかし極めて危険な仕事に携わった。結局は彼らを滅ぼすことになるこの活動は、長期国債の設定と、それを基礎とするイングランド銀行券の流通へと導いた。こうして形成されたシティがイギリス資本主義の発展とともに強力に構築されていったのである。このシティのなかの最高のプレスティジをマーチャント・バンカーに与えたのは、イギリス資本主義が先づ海外貿易のマーチャントたちによって推進されたという歴史的偶然に基づく技術的要因に他ならないのである。

ロンドン・ビルは当代の最も強力なマーチャントの引受によって世界を流通した。彼らに対する信認と、彼らの才能がロンドン・ビルという国際通貨を創造したのである。これはもちろん上述の歴史的条件下で実現されたのであるが、この歴史的事実は、自らに対する信認と自らの才能に基づいて国際通貨を創造するというマーチャント・バンカーの伝統の定立を意味するのである。

(4)

第2章の後半と、第3章『発行商社としてのマーチャ

ント・バンク』および第4章『マーチャント・バンクの投資マネージメントその他の活動』は、上述の要因から苦境に立たされたマーチャント・バンクの生存をかけての創意工夫のさまである。両大戦間から外国貿易の減少によってまさに氣息えんえんの状態にあったマーチャント・バンクは(同著者、「両大戦間のイギリスの金融政策と金融市場の変遷」『経済研究』1977年7月, p. 222), 1950年代の末になって漸く不滅の伝統を担って、再び頭角をあらわすことになる。

国際貿易の復活とともに、「マーチャント・バンクは、チューリッヒとニューヨークの余裕資金に手を伸し、彼らの国際的顧客、つまり国際的大企業からの資金の受入れ、またそれらへの貸出をはじめた」(p. 38)のである。マーチャント・バンクはロンドンに一大国際預金市場をつくり出すのである。早くも1964年にイングランド銀行はこの市場がおそらくは国際ビジネスの金融に利用できる資金総額を増加させたと指摘している(p. 49)。読者はいまや誰知らぬもののないユーロ・ダラーがマーチャント・バンクの先見性に裏付けられた創意工夫の苦心の産物であることを示される。イングランド銀行の指摘するとおり、これは国際流動性の、従って国際通貨の創造であり、国際金融の極めてソフィスティケイティッドな手法による効率化の成果である。

国際流動性の効率化、あるいは国際通貨の創造は決してマーチャント・バンクのみに委ねられてきたことではない。とくに第2次大戦後は国際通貨基金 IMF が国際間の公的な制度としてその任を独占してきたのである。しかし現在、国際流動性を支えている制度がもはや IMF でないことは明白である。国際金融の運営において死活的な、即時性と確実性の規準においてマーチャント・バンカーにまさるものはおそらくはなお存在しないであろう。著者布目氏は本書において IMF について一語も言及されていないのである。 [長谷田彰彦]

大野精三郎

『歴史家ヒュームとその社会哲学』

(一橋大学経済研究叢書 29)

岩波書店 1977. 1 x+279 ページ

1 本書はヒュームの没後200年に当る1976年に、わが国が生み出した最新のすぐれたヒューム研究である。それは、その表題が示しているように、ほとんど忘れら

れている歴史家ヒュームに焦点をあてて、その『イギリス史』をかれの思想体系のうちに新たに位置づけようとする試みである。本書は、1960年以来約10数年にわたる著者の着実な研究成果を、ヒュームについての「最終的見解」として新たにとりまとめたものである。

序論での研究史的展望が明らかにしているように、ヒューム研究は、歴史、法・政治、経済、哲学、倫理など多方面からする個別的研究の結果、それら諸研究の間の矛盾があらわになり、これは必然的にヒューム思想体系の統一的理解の試みを要請してきた。とくに『イギリス史』と哲学、ことに政治哲学との関連が問われてきた。これと並んで、『人間本性論』じたいの本格的な研究が N. K. スミスによって確立され、ヒュームの道徳哲学のしめる重要性が明らかにされた。他方、こうしたヒュームの体系内における歴史と哲学・政治哲学との関連とは別に、ヒュームを18世紀スコットランド啓蒙思想家集団のなかで捉えようとする、バスカル、ミークらの研究がすすめられてきた。このような研究史的視野のうえにたって、著者は、バスカル=ミークの問題提起と N. K. スミスによるヒューム哲学の構造的な研究という「二つのヒューム研究の潮流を統一化」することを基本的視点としている。ここから本書の目的は、ヒューム『イギリス史』をかれの体系、とくにその社会・政治・経済的側面と統一的に理解することにおかれる。これによって本書は、『イギリス史』の「政治的性格についての論争に終止符を打」つと共に、スコットランド歴史学派におけるヒュームの位置を明らかにしようとしている。

そこで本論は、I ヒューム理解の予備的前提にはじまり、II 市民社会の理論と方法、III 『イギリス史』の根本問題とその意義、の3部から構成されている。II ではまず、ヒュームの市民社会分析の基本的関心を、「市民社会の政治と経済の問題であり、そして近代社会の成立に至るまでの歴史を明らかにすること」であるとしたのち、N. K. スミスの分析に依拠しつつヒュームの道徳哲学全体の方法と構造がスケッチ的に展開されている。ここでの本書の注目すべき点は、『人間本性論』における経済活動の哲学的説明のもつ意義が明らかにされ強調されていることである。すなわちヒュームにおいては、経済活動は人間の本性に固有な活動意欲との関連で把握されているのである。ついでこの経済活動の結果たる財産を保護する必要から生ずる正義が取上げられている。これに続いて、ヒュームの道徳哲学、とりわけ政治・経済哲学に基づいた、現実批判としての政治論および経済論が、政治の側面に力点をおいて整理されている。